

サスポール石窟第3窟壁画現状調査および模写研究

京都市立芸術大学 非常勤講師 正垣雅子

ラダックの中心都市レーからインダス川下流へ西に60 km、北岸にサスポールという小さな村がある。サスポール村の対岸はアルチ村。12世紀に遡るアルチ寺の壁画はチベット後伝期仏教の初期の作例として、またカシミールの影響が強い表現様式として名高い。

サスポール石窟はラダックでは珍しい石窟寺院である。現在はサスポール石窟は廃寺でありリキル寺の管理下にあるようだが、実際には村人が管理している。Central Institute Of Buddhist Studiesの元教授ソナム・ツェリン氏(サスポール村出身)の話では、サスポール石窟寺院は修行地としてラサから支援が来るほど大変栄えていたという。いつの頃からか放棄され、現在のような状態になった。開鑿されている石窟の多くは僧房窟であったと思われる。2010年現在、壁画が残る窟は3ヶ所。その中でも第3窟と呼ばれている窟は、天井を除いて窟内の壁すべてに壁画が描かれ、見る者を圧倒する迫力がある。

サスポール石窟第3窟は南側に出入口を設け鑿窟された石窟で変形の五角形の形をしている。窟の面積は14平方メートル程。窟の天井は岩がむき出しの状態である。天井までの高さは窟の中央辺りは約4m、壁際では約1.5mである。

床は土で平滑に整えているが凹凸があり、踏むたびに細かい土埃が舞い上がる。床には天井から崩落したと思われる岩が5つ動かさずにある。窟空間を柱や煉瓦などで整備して作った様子はなく、出入口だけ角材で補強しており、現在はブリキの扉が取り付けられている。壁は小壁を含めて6壁あり、便宜上、出入口の右側から時計周りに南壁西側(第1壁)、西壁(第2壁)、小壁(第3壁)、北壁(第4壁)、東壁(第5壁)

写真17)、南壁東側(第6壁)と番号をつける。壁によって若干の差があるものの壁画の縦長は約1.3m。壁画の横長は南壁西側が約2m、西壁約2.4m、小壁約0.4m、北壁約4.3m、東壁約3.4m、南壁東側約3mである。それぞれの壁に、やや大きめに表された尊像を2段に配置し、その間を高さ約7cmの五仏の千体仏、ラマ、ヤブユム等が13~19段にわたって隙間無く並ぶ。背景を埋める尊像は赤で彩色された半円におさまり、背景全体は青で塗りつぶす。壁画の下限は魚を図案化した菱形の連続文様帯に区切られ、床から40cm程は何も描かれない。東壁、南壁西側、西壁の下方には仏伝が描かれる。壁画の上限は下限のように区切らずに、壁から飛び出している岩の際まで尊像で埋め尽くしている。北壁中央から東側の前方には長方形の土の壇が設けられているがその用途は不明である。西壁の西方浄土図の下に菱形文様帯で囲まれた縦約60cm、幅約70cm空間があり現在は巨石で塞がれているが、隣接した窟に行き来ができたのではないかと考えられる。

チベット暦4月15日はサガダワ sa ga zla ba という祭りがあり、そのたびに村人は窟の床をきれいに掃いて清めている。床の上には壁画の断片一つ落ちていない。

壁画は制作当初の様子をよくとどめている。チベット寺院壁画によくみられるコーティングはなされず、後世の補筆も認められない。クリーニングや剥落止め等など積極的な修理が施された様子もない。ただ、壁土が欠失して穴の空いた箇所、深い亀裂箇所には壁土を補填した修理箇所がある。特に東壁の曼荼羅にはその修理跡が目立つ。南壁東側の入口近くのパルナシャナバリー(葉衣観音)の欠失箇所だけ充填した土の色が異質である。

壁近くの天井の岩には岱緒系の土性顔料を塗った痕跡がみられる。



サスポール石窟全景



サスポール石窟第3窟内部

壁は平坦に整えているが、岩壁そのものの丸みや凹凸をひろっているため、完全な水平、垂直の面ではない。砂礫の岩壁の上に土にスサを混ぜたものを塗り壁土としている。粗い壁土で岩の凹みや狭間を埋めて平らにし、さらに細かい土で上塗りをして表面を整えている。壁土の厚さは1 cm 程でチベット仏教壁画に通常使用される白土を塗って仕上げている。

壁画の状態は一見すると彩色がよく残っているけれども、壁画全体に細かい亀裂、剥落、汚れの付着がみられる。壁土と白土層の間の固着が不安定なため、圧力や衝撃がかかると白土層がこぼれ落ちる状況である。特に壁の下方にいくに従って、剥落が進行し壁土がのぞく面積が広がる。彩色の厚みは薄く白土層との固着は比較的安定しているが、赤の彩色箇所は白土層との乖離がみられる。壁画全体に見られるシミのほとんどは風雪による水滴が壁面に付着してできた輪のような水シミ、その水滴が垂れて顔料を流していった痕跡である。また、北壁の釈迦、赤帽ラマ、黄帽ラマの光背や衣などの赤の彩色箇所ですら少し光沢のある黒っぽい変色している箇所がある。壁際の天井付近に塗られた岱赭系の土性顔料が東壁や南壁東側の上部には壁画の上に垂れたり、飛び散った痕跡がある。

壁画の制作はまず、墨打ち紐を使用し水平垂直の直線を引き配置を決めた後、木炭や岱赭線でおおまかにあたりの線を取り墨で線を起こす。背景に描かれる五仏、ラマ、ヤブユムはこの墨線が仕上がり線の線となっている。彩色は薄く単純。蓮弁の暈しや文様の描き込みなどチベット仏画特有の緻密さはない。サスポール石窟第3壁に使用された顔料は、青は藍銅鈹（群青）とインディゴ、赤は弁柄とラック、茶系は岱赭のような明るい土色顔料である。黄色は黄土、丹の使用も一部に認められる。チベット仏画では赤色顔料は朱、黄色顔料はオーピメント、緑色顔料は孔雀石（緑青）が専ら使われているがこの壁画にはみられない。赤の彩色に関しては、弁柄に重ね塗りをして赤の発色を深めている箇所がある。それらは弁柄の上からラックを塗った色調に近い。塗り重ねの一部には黒っぽい変色が認められることから、濃度の薄めた朱を重ね塗りした可能性もある。緑は孔雀石ではなく、発色の鈍い緑土か黄土と藍の混色でつくられていると推察される。

サスポール石窟第3窟壁画の様式は壁全体を区画に構成し尊像を配置し、何れも正面性の強い尊像の肉身、シンメトリな蓮弁の描き方、尊像の両脇にマカラを上部においた装飾的な柱を描く点など12世紀後半～16世紀にチベット文化圏で普及していたベリ（ネパール）様式の特徴を示している。北壁の中央釈迦如来の身体比率は15世紀後半以降広く普及する仏画流派メンリ派で規定された図像の寸法とほぼ合致するが、頭部の割合はネパール・ムスタン地方のルリ寺 Luri Gompa（13世紀末）と近い。東壁に仏教宗派ゲルク派の創始者ツォンカパ（1357～1419）の集会樹やゲルク派で尊重される尊像が描かれることから判断すると制作年代は15世紀以降となり、サスポール石窟第3窟壁画はベリ様式の終末期作例と位置づけることができる。

壁画に描かれた主な尊像は、『Buddhist Iconography of Tibet』『藏伝仏教神明大全』を用いて比定した。さらに、2010年9月時点のサスポール石窟第3窟壁画の尊像の37体と南壁西側の六ターラ菩薩尊、東壁の曼荼羅3面は壁土の亀裂、



サスポール石窟釈迦如来頭部（赤線）とルリ寺釈迦如来頭部（青線）



十一面千手千眼観音 模写

白土層の剥落、壁画表面に生じた水しみ、付着物、変色を中心に現状損傷地図を作成した。

伝統的なチベット仏画の画材を調べるためにインド ヒマチャル・プラデーシュ州のダラムサラで仏画宗派の一つメンリ派の伝統を継承する絵師ミグマル氏を訪問した。ミグマル氏の話ではチベットでは群青と緑青の2色が入り混じり合った鉱石がとれることが多いので粉碎した後に青と緑に分ける。そして、さらに細かく粉碎し4段階の明度に分け、それらは固有の色名で呼び分けている。青の中にも緑が緑の中にも青が混じっている様子が目みても確認できる。赤は辰砂の鉱石を、黄色はオーピメントを自分で粉碎して作る。橙色は鉛丹、茶系は黄土など土性顔料を使用する。白は白亜または白土。暈しや輪郭線に使用するのはレーキ顔料の藍とラックを用いる。ミグマル氏は黄色の染料は使用しないと話してくれたが、他のチベット仏画絵師はケルパという灌木の根を煮出したもの、シュラムという葉から得られる染料を白色の雲の暈しに使うという。ケルパもシュラムも黄土色のような明度の低い黄色であるようだ。顔料はスパイス店で入手できるが、必ずしも一定の品質のものいつでも手に入るとは限らない。特に良質の群青、緑青の入手は難しいようであった。膠は牛または水牛の膠を使用する。ここで手に入る膠は不透明な褐色のもので臭いもきつい。こういった膠は画布づくりの使用に適しているけれども、彩色には日本製の粒膠が用いられていた。良質の顔料や膠が安定的に手に入らないためか、若い絵師にはアクリル絵具を用いる者も増えているのは残念なことである。

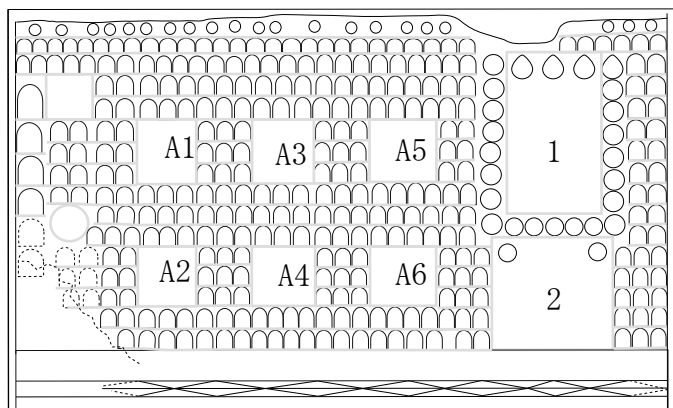
サスポール石窟第3窟西壁十一面千手千眼観音菩薩像の模写制作は壁を再現し行なった。白土層に使用する膠はチベット、ネパールの仏画下地に使用される水牛膠を用いた。顔料は日本絵画に使用するもので代用、ラックはチベットで作られる方法で抽出した。壁に描く事でサスポール石窟壁画の描線の確かさを実感する。材料の選択や工夫などを通して壁画の制作工程を追うことができた。



南壁西側 緑ターラ菩薩の損傷地図

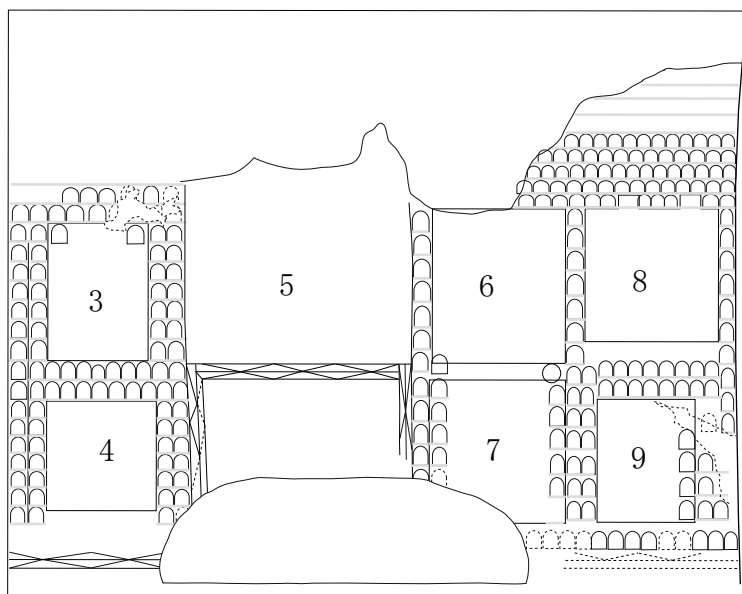
凡例： — 白土層から剥落 白土層の亀裂 — 付着物 — 水染み 水による画像の不明瞭箇所 — 壁土からの亀裂 — 変色

南壁西側（第1壁）



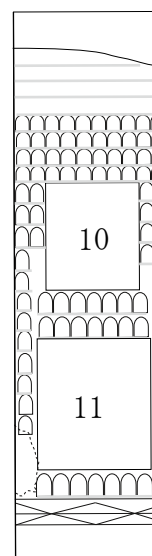
- A1 ターラ菩薩の一種
- A2 ターラ菩薩の一種
- A3 白傘蓋仏母
- A4 弁財天
- A5 ターラ菩薩の一種
- A6 ターラ菩薩の一種
- 1 緑ターラ菩薩
- 2 白ターラ菩薩

西壁（第2壁）

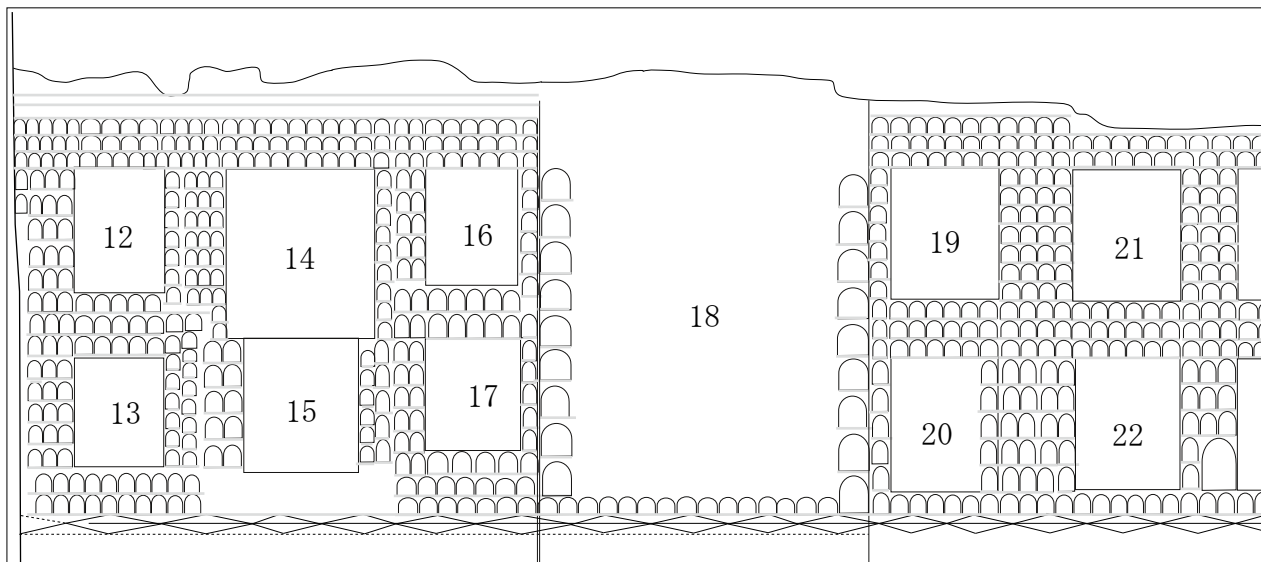


- 3 左：獅子吼菩薩
右：文殊菩薩
- 4 左：心を静める観音
右：六道を救う観音
- 5 西方極楽浄土図
- 6 十一面千手千眼観音
- 7 仏頂尊勝母
- 8 文殊菩薩／弥勒菩薩
- 9 ドルジェナムジョン

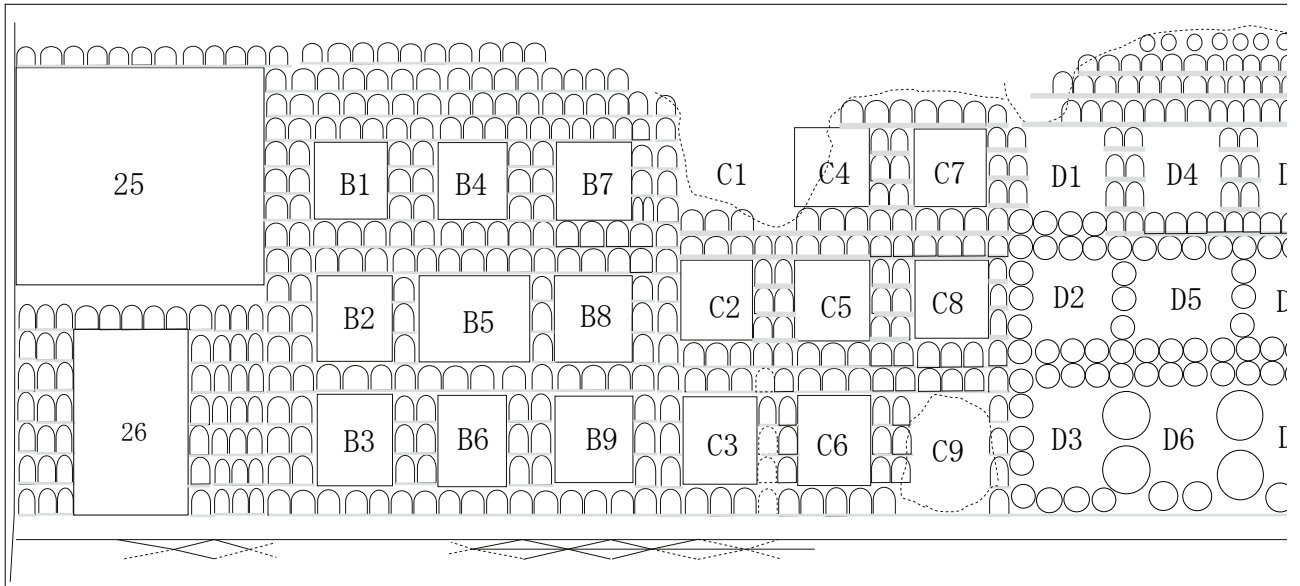
小壁（第3壁）



第4壁（北壁）

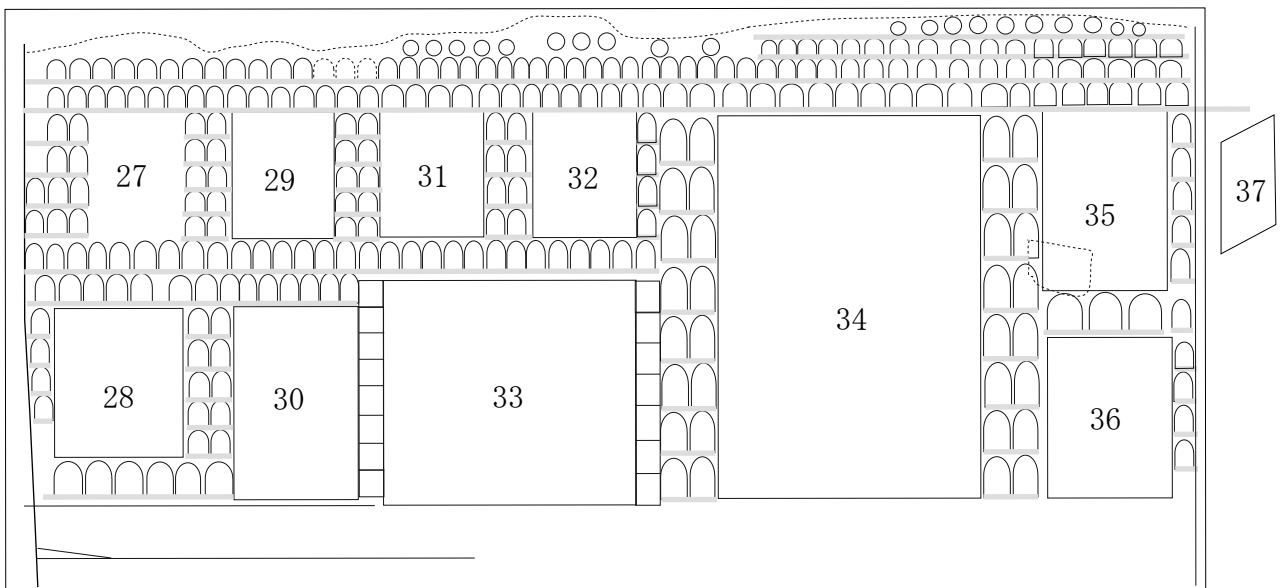


東壁（第5壁）



- 25 ツオンカパ集会図
- 26 観音菩薩もしくは弥勒菩薩
- B1～B9 悪趣清浄五仏四明妃曼荼羅
- C1～C9 曼荼羅
- D1～D9 曼荼羅

南壁東側（第6壁）



- 27 文殊菩薩
- 28 毘沙門天
- 29 四臂観音菩薩
- 30 クルキ・グンボ
- 31 金剛手（忿怒形）
- 32
- 33
- 34 マハーカーラ（一面四臂）
- 35 パルナシャヴァリー
- 36
- 37